
見習い勇者? (クロス)

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見習い勇者？（クロス）

【Nコード】

N7958Z

【作者名】

零堵

【あらすじ】

七か月前に書いた「見習い勇者」のリニューアル版です。前と違って、文章校正が違っています。勇者と決めつけられたリヨウは、仲間を集め、嫌々ながらも魔王退治に行く事にしたのでした・・・

く第一話く勇者誕生？く（前書き）

この物語は、不定期連載としたいと思いますく

～第一話～勇者誕生？～

世界は、暗黒に包まれようしていました。何故なら魔王が復活したからである。

これは魔王倒す為に冒険をする事になった者達の物語である。

ここは、どこかの小さな村、この村は豊かでもなく

寂しい感じのする場所であつたが、人々は皆、暖かくのどかに暮らしていたのである。

「もうこんな特訓嫌だ〜！」

そんな中、余りにも悲痛な叫びが聞こえた。叫んだ者は、父親らしい人に文句を言っている。

「何を言う！こんな特訓でも足りないと言つのに！文句があるのか？勇者よ！」

「だから俺は、勇者になりたくないんだって！ちゃんと名前があるんだから名前で呼んでくれよ！親父！」

そう勇者と呼ばれた、人物は言つた。ちなみに彼の名前は、リヨウと言つた。

「しかしだな、リヨウよ！お前はこの父、ザインの息子なのだ！、祖父が魔王を倒した勇者だったのだ、時が過ぎ、私も祖父の意思を継ぎ勇者になろうとした・・・だが、肝心の魔王がいなかったのだ、だから仕方がなく結婚をして子孫に勇者を継がせようと思つたのだ、そして時は来た！魔王復活の知らせだ！だからお前が勇者なのだ！」
そう熱く語るのは、勇者の父親、ザインであつた。ザインはこの村で建設業を営みながら、

趣味で色々な場所を歩くトレジャーハンターでもあつた。

「だからって俺がやる事はないだろう？だって俺に何ができるんだよ！」

そう勇者は言うと、ザインはいきなり勇者をひっぱたく。

「馬鹿者！何の為に前にも格闘術、武術、暗殺術を教えたと思っている！」

「それは、勝手に親父が学ばせたんだろう！」

「おつやる気か！父に情けは無用だ、存分に来い！」

「うおおおお！」

勇者は、ザインが投げてきた竹刀を取ると、ザインに向かって突撃した。

「まだまだ甘いわ！勇者の鉄則、技名は必ず大声で言うのだ！、こんな風に！はあ！流星斬！」

ザインは、竹刀を垂直に構えて、勇者に向かって一気に降り下ろした。

「いた〜！」

勇者は、避けようとしたけど、ザインの剣技が余りにも早くて、避けきれなくて頭に直撃したのであった。

「まだまだ甘いぞ！勇者よ！それじゃすぐやられるぞ！」

「だったらどうすれば良いんだよ！」

「もっと修行するのだ勇者よ！それで魔王を倒すのだ！」

「だから、嫌だと言ってやるだろ〜！！！」

「勇者よ、そんな事言っではなら〜ん！おつともうこんな時間が、私は仕事に行く、しっかり鍛えているのだぞ？」

ザインは、そう言った後、勇者の元から離れて行ったのであった。

「誰が鍛えるかよ、俺はあそこに行つてやる」

勇者は、そう言う村を出たのであった。

「今日も疲れたからあそこで寝るか〜」

勇者が向かった先は、森の中、勇者は森の中の秘密の場所と、勇者が勝手に名付けた場所に向かう事に決めたようである。

「ふう、あんな特訓ばかりしていたら疲れるつての、ん？」

勇者は何か見つけたようである。

「誰か倒れてる！」

勇者は、秘密の場所に倒れているのを見つけた。

「おい、しっかりしろ！それにしても・・・」

勇者は、倒れている者の姿に驚いた。何故なら勇者と同年ぐらいに見える少女であり、服装は紫の三角状の帽子をかぶり、杖を装備していた。俗に言う魔道士と言う格好なのだが、勇者は知らなかった。

「凄い傷だらけだ・・・何かにやられたのかな？」

「う・・・ここは・・・」

「あつ気がついたみたいだな、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないから倒れていたんです、私はある人を探してこんな場所まで来ました・・・」

「そうか、大変だったんだな、傷の手当てが必要だろ？とりあえずうちで手当てするか？」

「色々ありますがございます、でわそうさせて貰いますね、あつそう言えば貴方の名前、まだ聞いてませんでした」

「俺か？俺はリヨウと言うんだ、君は？」

「私は、マイと言います、よろしくです」

マイと名乗った少女は、ふらふらで今にも倒れそうだった。

「こうしちゃいられないな、早速、家に戻るか」

勇者は、傷が深いマイをおぶって勇者の家に運ぶ事にしたのであった。

勇者の家

「あら、勇者、おかえりなさい、って、その子どうしたの！？」

「こいつは森の中で・・・」

勇者が、そう言う前に、勇者の母親はこう言ったのであった。

「まさか、勇者、その子、貰って来ちゃったのね！そうなのね！あつなんて事・・・私の自慢の息子がこんな事を・・・」

「違つって、この子が森で倒れてたから傷が酷いから手当てに連れてきただけだつて！」

勇者が、そう言うと、母親は納得したように頷く。マイは意識を失っていたのであった。

「これは大変ね、早速応急処置だわ」

勇者の母親は、マイをベットに寝かせ看病をした。勇者も母親の手伝いをしたのであった。

そしてその看病は丸一日使ったのである。

次の日

「う・・・ここは？」

マイの傷はほとんど完治していた。

「気がついたみたいだな」

「あっはい、ここは？」

「ここは、俺ん家だ、マイは意識失って俺が運んだんだぞ？」

「どうもありがとうございます、えっと・・・リヨウさん？」

「リヨウで良いよ、俺もマイって言ってるし」

「あっじゃあそう呼ぶ事にします」

「あら、気がついた見たいね？」

勇者とマイが話していると、勇者の母親が話しかけてきたのであった。

「どうも、傷の手当てしてくれてありがとうございます」

「あら、いいのよ？それより勇者？ザインが修行するから来いと言ってるわよ、さっさと行きなさい？」

「解ったよ、じゃあ行ってくるよ」

勇者は、武器を構えると外に飛び出したのであった。

「あの！今、勇者って言いましたよね？」

「え、ええ、言ったわよ？それがどうかしたの？」

「実は・・・、私は探している人がいたんです、まずなんで探していたかお話します」

マイは、これまでの事を勇者の母親、ミカリに言うのであった。

「実は、私の住んでた町は、魔王の攻撃によって滅ぼされたんです、

それで私は過去に魔王を倒した者、すなわち勇者を探していたんです」

「そうだったの、大変だったのね？」

「ええ、大変でした、あの聞きたいんですけど、本当に勇者なんですか？リヨウは？」

「本当はお父様が勇者だったんだけど、高齢だからね、息子に継がせたの、だから勇者に間違いはないわよ」

「そうですか！探したかいがありました、あつ所でザインって誰です？」

「勇者の父親、つまり私の夫よ、今、勇者に修行させてるから、帰って来たら事情を話したら？きつと力になってくれると思うわよ？」

「はい、解りました、そうします」

マイは、勇者が戻って来るのを待つことにしたのであった。

く夜く

「ただいま」

勇者は、日が暮れてから帰って来たのであった。後ろにはザインがいた。

「おかえりなさいませ、勇者様」

マイは、そう言う。勇者は驚いたのであった。

「え？勇者様って？確かに俺は勇者って呼ばれるけど？」

勇者がそう言うのと、マイは安心した顔で、勇者に話すのであった。

「実は、私のいた国は、魔王によって滅ぼされたんです、私は敵討ちに修行して、旅を続けていました、そして噂で聞いた魔王を一度倒した者、勇者と呼ばれた人を探してたんです」

マイが、そう言うのと、ザインがこう言った。

「そうであつたか、よし勇者よ、この子の手助けをしてやれ！」

「ええ！手助けて！俺は嫌だよ！」

勇者は、嫌がつた。それを聞いたマイは、泣きそうな顔をしてこう

言った。

「駄目ですか・・・？」

「う・・・」

勇者は、嫌そうにしてたが、こういうのには弱かった。

「ほら・勇者？こんなかわいい子の願いを断る気なの？」

ミカリは、そう言う。勇者は観念したみたいで「解った、手伝うよ」と言った。

それを聞いたマイは、嬉しくて勇者に抱きつく

「あ、ありがとうございます〜！」

「解ったから、抱きつくのはやめてよ、恥ずかしいし」

「あつすいません、ちょっと嬉しかったもので」

その光景を見ていたミカリは、こう言った。

「あらあら若いっていいわね」

「そうだな、良し勇者よ、お前に渡す物がある」

ザインは、そう言う。奥の部屋から一本の剣を持ってきたのであった。

「親父、この剣は？」

勇者がそう聞くとザインは、剣を渡すところだったのであった。

「この剣はな？先代の勇者が使っていた由緒正しき剣だ、これをお前に託す、さあ勇者よ今こそ旅立つのだ！」

「え？旅立つって・・・それ断っちゃ駄目？」

勇者が、そう言う。ザインはこう言ったのであった

「当たり前だ！お前は勇者なのだから、魔王を倒しに行つてこい！」

「そうです！勇者様、私と一緒に行きましょう」

マイも、ザインと同じ様な事を言う。勇者は「解った、行くよ・・・」と、OKしたのである

こうして、勇者とマイは、魔王を倒す為に旅立つ事になったのであった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7958z/>

見習い勇者? (クロス)

2011年12月25日16時45分発行